

講話する中坊先生。



## クニマスを次世代へ

### 田沢湖クニマス未来館の運営を協議



成熟したオスのクニマス。

7月13日、田沢湖クニマス未来館の現状や課題などを協議する「田沢湖クニマス未来館の運営に関する会議」が同館で開催され、京都大学名誉教授で名誉館長の中坊徹次先生や同館アドバイザーの三浦久さん（田沢湖丸木舟の会代表）のほか、（一社）田沢湖・角館観光協会職員、市職員など13人が出席しました。

会議に先立ち、中坊先生から「私たちはクニマスから何を学び、何を伝えるか」と題して講話が行われました。講話では、田沢湖からクニマスが消えてしまった歴史などを振り返り、同館が果たす役割などについて説明。中坊先生は「未来館にはクニマスがなぜ減ってしまったかを伝える役割がある。広く発信していくことはもちろん、クニマスの知識を次の世代につないでいくことが大切。そのために学校と連携し、子どもたちがクニマスにふれる機会の充実を図っていく必要がある」と話しました。また、観光面にふれ「田沢湖とセットで県内外にPRし集客を図っていかねばならない」と述べました。

講話終了後には、同館の現状と課題について協議が行われ、出席者から様々な意見が出されました。今後は、出席者を中心とした運営委員会（仮称）を立ち上げ、同館の運営について協議していく予定です。



清掃活動をするせんぼく校の生徒たち。

## 歴史ある里山を守るために 大塚山・七面山の里山整備活動

7月14日、日蓮宗大塚山妙徳寺に里山地域貢献パートナー協定を締結した三者（㈱伊藤園・NPO法人角館里山再生プロジェクト・仙北市）と大曲支援学校せんぼく校中学生徒あわせて約30人が集まり、大塚山と七面山の里山整備活動が行われました。

猛暑の中、始めの会で同再生プロジェクトの佐々木正己理事長から「せんぼく校の皆さんと活動をして3年になる。熱中症に気をつけて水分補給をこまめにするように」とあいさつをいただきました。

会終了後、七面堂や大塚山祖師堂に落ちている下草や枝を集めました。途中の休憩時間では、小川さんが同校の皆さんの活動に対し、普段は公開していない祖師堂のご本尊を拝観させていただく機会を設けてくれました。小川さんは「とても元気に清掃活動してくれて感心した。また、歴史についても熱心に話を聞いてくれてうれしい」と話しました。

作業終了後、妙徳寺書院で行われた終わりの会では、同校の生徒から各関係者に手渡し鎌足和紙の記念品が手渡されました。今回、司会進行を務めた中学部3年の伊藤太翔さんは「利用する人がけがをしないように道をきれいにできてよかった」と感想を述べました。また、今回の活動から初めて参加する㈱伊藤園マーケティング本部販売促進部第一課グループリーダーの吉田亮さんは「今年の秋ごろに植樹をする予定があるので、スタッフを増員しながら、今後の活動にも貢献していきたい」と話しました。



景観について説明する北原教授。

## 仙北市景観づくり市民会議 角館小学校で景観学習教室

6月30日、梅雨空が続く中、この日は晴天に恵まれ、角館小学校6年生76人が、景観学習の授業を受けました。

地元の景観について関心を高める狙いとして、景観づくり市民会議（嶋崎辰雄会長）が企画し、講師として弘前大学の北原啓司教授と福島大学の村上早紀子准教授が務め、総合学習の授業の一環で行われました。

授業では「景観って何だろう。景観の『景』とは景色のこと、自然やまちの様子をいいます。『観』はごうという意味が考えよう。観光や観察の言葉に使われています。観は『みる』という意味です。『みる』は見ることも書きますね。どう違うでしょう」と問いかけると、児童からは「見るはただみることで、目に見ること。観るはじっくりみることで、



児童たちは実際にまち歩きをして、景観について学習を深めました。

目を凝らせてみることで、心で感じること」などの声が上がりました。

この後、児童たちは5人ほどのグループに分かれてまち歩きを行い、自分が好きだなと思うところ、いやだなと思うところを写真に撮りました。

嶋崎会長は「写っているのは玄関脇に置かれた鉢植えの花だったり樹木に囲まれた白壁の古い屋敷だったりするでしょう。あるいは、私たち大人がこれでよしとしている雑然とした建物の形や外壁だったり、たくさん電線だらけの電柱だったりするかもしれません。児童たちは、同じまちを歩いて他の人とは違う感じ方があることを知るだろうし、自分だけでなくたくさんの人が好きだな、心地よいという景観がこの街にはたくさんある、その景観を守りさらによいものにするにはどうすればよいか、考えてくれたら嬉しいですね」と話しました。

## 新幹線で仙北市産新鮮野菜が東京駅へ！

7月2日、秋田新幹線こまちを活用したスピード輸送により、仙北市産新鮮野菜が東京駅に運ばれました。これまで、仙北市とJR東日本秋田支社は「五感楽農」と銘打ち、秋田新幹線を交通手段とした農業体験ツアーを実施してきましたが、コロナ禍で人の往来が難しい現状のため、今年度は物流に着目し、首都圏の方々に発送した農産物や加工品をその日のうちに食卓で楽しんでもらえるよう実施したものです。



新幹線に商品を積み込んで、いざ東京駅へ！

輸送したのは、（一社）仙北市農山村体験推進協議会が、昨年からの農家民宿などの農作物や山菜、漬け物を販売している「母さんのおすすめセット」をベースにした商品で、JRE モール通販サイト「ネットでエキナカ」で注文を受け付け、輸送日当日に、東京駅地下「BAGGAGE STRAGE+」で受け取る仕組みです。



「母さんのおすすめセット」の準備をする（一社）仙北市農山村体験推進協議会の皆さん。

第2回目として、8月20日には仙北市産の野菜や加工品のほか、地ビールもセットにした商品を新幹線輸送する予定です（販売受付は8月5日からを予定）。この機会に首都圏在住のご親族や友人、知人の方々にふるさとの味をお届けしてみませんか？

※詳細については、JRE モール通販サイト「ネットでエキナカ」をご覧ください。（インターネットで「ネットでエキナカ 仙北市」で検索）

善意ありがとうございます

安心安全な学校生活の一助に

## (公社)大曲法人会が 足踏み式消毒スタンドを寄贈

7月1日、公益社団法人大曲法人会（塩谷國太郎代表理事・会長）より市内の各小学校に足踏み式消毒スタンドと消毒液20リットルを寄贈いただきました。  
同会は、公益事業の一環として様々な地域貢献活動に取り組んでおり、新型コロナウイルス感染症対策として児童たちが安心して学校生活を送ることができるようにと今回の寄贈に至りました。

塩谷代表理事・会長は、「コロナ禍で手洗いやうがいなど基本的な生活様式が見直された。手指消毒をすることで、児童たちが安心安全な学校生活を送る一助になればとの思いで贈らせていただいた」と話しました。

寄贈いただいた足踏み式消毒スタンドは、市内小学校6校に設置され、児童たちの手指消毒に活用されています。



角館小学校では玄関から入った先に設置され、児童たちが消毒していました。



左から大曲法人会の吉田裕幸業務執行理事、塩谷代表理事・会長、梁田一史仙北市校長会小学校長会長、須田橋教育長。

## 市長の まちづくり No.182 日記

### 『新・過疎法のメッセージ』

仙北市長 門脇 光浩

4月1日、新・過疎法(正式名称は過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法)が施行されました。仙北市は、合併当時は旧西木村だけが過疎指定でしたが、その後の改正で市の全域が指定になりました。県内では大潟村と秋田市の一部を除き、ほかはすべて過疎指定です。過疎と言ふ名称から後ろ向きイメージが拭きませんが、自治体経営上は国庫補助の補助率の高上げ、過疎債の発行(返済金の7割は国負担)、金融や税制などの優遇措置などで助けられています。

過疎法は、昭和45年に初めて制定されて以来、議員立法で4回の改正と延長を繰り返してきました。今回の法律で5回目です。ここに至る前、法案は全国の市町村長や議会での議論を踏まえ、識者検討の後、自民党の過疎対策特別委員会が中心になって素案をまとめました。そのうえで各党協議を行い、衆・参両院で全会一致で可決成立しています。

正は過疎そのものからの脱却に重きを置いていました。しかし今回の新・過疎法は、これまでとは異質の改正だったと感じています。一番の違いは過疎の重要性を明文化したこと。新・過疎法の前文に、「食糧と水とエネルギーの安定供給、生物多様性の確保、多様な文化継承など、過疎地域の機能が発揮されることが国民の生活に豊かさや潤いを与え、人口の過度な集中による大規模災害や感染症の危険の中で、過疎地域の役割は一層重要になった」とする意味合いの記述があります。また第1条の法律の目的に「人材の確保及び育成」、第4条の対策の中に、「移住・定住・地域間交流の促進」、などの記述が見えます。都市部にはない価値が過疎地にあること、それを守り伝えることが国家・国民のためになること、人材の育成も含めて、過疎地を国が支えるんだと、そんな強いメッセージに満ちた新・過疎法だと受け止めています。

新・過疎法を抛り所に、コロナ禍の中で、またコロナ後で、過疎地が新たな挑戦と可能性に満ちた場所となるよう、市民協働の作業が続きます。

## 「百寿」

### おめでとう イキッます

7月10日、高橋トキエさん(角館町雲然)が100歳の誕生日を迎えられ、自宅でお祝いが行われました。当日は、家族の皆さんが集まり、仙北市からお祝いと花束が贈呈されました。



鈴木長寿支援課参事(左)からトキエさん(中央)に手渡されました。

## みんなで取り組む

### エスディー・ジーズ SDGs

vol.12

### 地域の未来のために、私たちができることはなんだろう？

あたり前の暮らしをこの先もずっと続けるために、私たち一人ひとりが考え、行動に移すことが大切です。SDGsは、「誰一人取り残さない」社会を実現する世界共通目標です。

全部で17個あるSDGsの目標のうち、今号は「目標11」をご紹介します。

問 仙北市地方創生・総合戦略室 ☎43-3315

17の目標から今回紹介するのは…



これ！

### 私たちにできること

- ▶災害時の避難所を確認する。
- ▶テレホンサービス(テレドーム※)を利用してみる。
- ※防災無線が聞こえにくい時の放送内容確認サービス ☎0180-991555(通話料がかかります)。
- ▶安全安心メールを登録する。
- ▶総合防災課ツイッターをフォローする。(@bousaisemboku)

安全安心メールの登録をしてみましょう



登録用  
二次元コード

### SDGs 目標11 住み続けられるまちづくりを

誰もが安全に、安心して住み続けられるまちづくりは、行政にとっての究極目標です。仙北市はこれまで様々な災害を経験し、それらを乗り越えることで対応力を強化してきました。被害を最小限に抑えるために重要なことは、情報収集と情報伝達です。

現在は、市民の皆さまから電話などで被災情報を提供いただいたり、防災無線で注意喚起をしたり、安全安心メールやホームページでの情報発信も行ってはいますが、まだまだ十分とは言えません。市民の皆さまと行政が双方向で適切な情報共有ができるよう、今後もあらゆる手段を検討していきます。

### 問題になっていること

- ▶誰もが安全に、安心して住み続けられるまちづくり
- ▶行政情報や災害情報の確実な伝達

## 栄光・表彰 ~輝くとき

### 第19回秋田県小学生ソフトテニス選手権大会

## 加藤・進藤ペアが 第3位に入り 全国大会へ

7月3日、第19回秋田県小学生ソフトテニス選手権大会が大館市高館公園テニスコートで開催され、男子1部リーグに出場した仙北市ジュニアの加藤悠愛・進藤大翔ペアが第3位に入り、全国大会への切符を手に入れました。全県から34ペアが出場した同部で加藤・進藤ペアは、準決勝で惜しくも敗れましたが、最後まで粘り強い戦いで健闘しました。

全国大会は、8月5日から4日間の日程で千葉原白子町を会場に開催されます。



第3位に入った加藤さん(左・生保内小6年)と進藤さん(右・西明寺小6年)ペア。